

錯覚の科学

クリストファー・チャブリス
ダニエル・シモンズ 著

錯覚にはいろいろ種類がある。まずは、物理的錯覚（屋敷樫やドップラー効果）、知覚的錯覚（だまし絵や錯視）、認知的錯覚（不注意や勘違い）に分けられる。本書で言う錯覚は認知的錯覚である。注意、記憶、推論、自己認識などの錯覚が具体例や文献とともにわかりやすく解説されている。

認知的錯覚は、その誤った見方を捉え方を訂正して正しく認識し直すことが可能である。ところが人間にはその訂正能力を過大に見積もる「錯覚」もある。それにもっと気を配ろうと著者たちは言う。たとえば、原題にもなっている「見えないゴリラ」は心理学や神経科学の研究者の間では有名な面白デモで、バスケットボールのパスをしている中をゴリラの着ぐるみが胸を叩いて目立つように横切るといふ動画であるが、パスを数えている観察者の約半数はゴリラに気づかなかつた。注意の資源は有限だということだ。しかし、



（木村博江訳、文芸春秋・1571円）
▼チャブリス氏、シモンズ氏とも米国の心理学者。

不注意・勘違い、具体的に解説

「そんな目立つものは簡単に気づくはずだ」と多くの人は考える。これが「錯覚」だ。たとえば、クルマの運転中の携帯電話の使用はハンズフリーの機種でも注意が不足して危険なのだが、多くの人はそう思わない。

著者たちは「モーツァルト効果」をやり玉に挙げる。「モーツァルトの音楽を聴くと頭がよくなる」という迷信のことだ。この迷信の発生源は科学誌「ネイチャー」に1993年に掲載された論文であるという。モーツァルトを聴く被験者群、リラクゼーションのテープを聴く群、同時間黙って座っている群に事後にテストをしたら、モーツァルトを聴いた群の「抽象的推理能力」得点が他よりも高かったというのだ。心理学としてはずいぶん甘い実験計画である。どうダメなのかは本書を読んで頂くとして、この迷信は科学的な批判を浴びても沈静化するばかりか、何のデータもないのに「モーツァルトをこどもに聴かせるとよい」という方向に化けてしまった。

そのほか、脳トレやサプリメントに言われているような効果はないなど、エセ科学への批判は容赦がない。直感的な思考の危うさも指摘する。もっとも、本書は啓蒙書ではなく、大人向きの楽しい科学本である。翻訳もすばらしい。

立命館大学教授 北岡 明佳